

インタビュー・翻訳 喜多千草

ジュディス・バトラーは、『ジェンダー・トラブル』（邦訳：竹村和子訳、青土社刊）などのフェミニスト理論の著作によってアメリカで最も影響力のある思想家のひとりと言われる左翼哲学者である。現在、カリフォルニア大学バークレイ校の修辞学・比較文学科教授。

彼女の理論については『現代思想』（青土社）の2000年12月号の「ジュディス・バトラー」特集号などに詳しい。バトラーは一貫して同時代状況へコミットしており、彼女の言論活動は、その意味できわめて政治的である。難解であると言われるものの、新しい認識の枠組みを呈示し議論のありようを方向付けようとする力に満ちた論陣を張り、彼女はさらなる意味付与を伴う拡大的概念の流通を引き起こしてきた。たとえば、バトラー自身が『ジェンダー・トラブル』の10周年版前書きに書いているように、彼女の「パフォーマティビティ」といった用語が、さまざまな意味合いへと拡大解釈・適用されてきたのは記憶に新しい。

そのバトラーは、9.11発生時はプリンストン大学での1年間のサバティカルを過ごすために、ニューヨークにほど近いニュージャージー州に居を構えていた。アメリカが戦争支持で一色になっていったと言われた時期をバトラーはどのように過ごしてきたのであろうか。また、彼女自身は、これまでの著作のなかでも、しばしば言論活動の枠外にあるものとして「メディア・イメージ」の力ということに言及しているが、本号の特集であるテレビについて、9.11以降のアメリカでどのように考えてきたのだろうか。

——あなたはこれまで「メディア・イメージ」という言葉を用いて、ジャーナリズムを通じて流通するイメージについて触れていらっしゃいますが、それについて少し詳しくお聞かせください。

バトラー：私はしばしば、テキストを視覚化していると考えられているイメージについて言及してきました。つまり、たとえば、新聞の記事を説明していると考えられている写真、あるいは、テレビで誰かがテキストを読んでいる背後に流れている映像、あるいは、誰かが読んでいるテキストに合わせて、それを説明するものとして流される映像のことです。しかし、実際のところ、映像は、言葉によっては創られ得ない別のリアリティを創りあげているわけです。そのやりかたというのは、言葉が構築的に行うのとは違うものです。

特に戦争時においては、映像は、語り、レポート、解説などといったものができないことをしています。こうした時期に「メディア・イメージ」、特に、グローバル・メディア、あるいはインターナショナル・メディアなどと呼ばれるものが創りあげるイメージというのは、共通認識としてのリアリティです。あるいは、公共の場における視覚的なレファレンスを創りあげているといってもいいでしょう。誰もが、同じリアリティを見て、同じアングルから事柄を把握する。そして同じ映像を見ることを通じて、皆が互いに結びついていることを確認するという状態が創られるわけです。つまり、メディア・イメージを通じて、そういう公共の場があるという感覚を創りあげることができる。まさに、あるリアリティの視覚的な



Judith Butler

アングルと解釈を与えることによって、公共の場というものを創りあげることができるということです。そして、このような公共の場の感覚は、多くの場合、厳密には言語的には翻訳不可能なものです。こうしたメディア・イメージは、記号の一種だと言ってもよいかもしれません。つまり、それはリアリティを表現しているものなのであって、リアリティそのものではない。表現行為の動機となるものです。それは、ある意味では言語と同じような記号だとも言えるわけですが、語り、レポート、解説などといったものとは違うものです。

そして、もうひとつこうした戦時中に気にしておかなければならないことは、与えられたイメージが公共の感情をも創りあげることです。つまり、人々は、同じイメージをみて、それを解釈するというだけではなく、一緒に「感じる」というわけです。つまりマス・メディアのイメージによって、ある種の常識的な共通の感情というものが生まれる。ここに問題があります。なぜならメディア・イメージは、いつもある種の枠を持っており、編集されているからです。ある種の情報を含んでいる一方で、他のものを排除していて、しかも、何が排除されているのかは示さないで、いつもただ含まれているものだけをリアリティそのものとして呈示するのですから。

例えば、ニューヨーク・タイムズの死亡記事がどのように機能しているかを考えてみましょう。このところ掲載されている9.11の攻撃でワールドトレードセンターで亡くなった方たちひとりひとりのことを伝える異例の死亡記事欄のことです。もちろん、ある意味では、誰もが、そこで亡くなった方たちの人となりを知ることができるというのは素晴らしいことだと言えるでしょう。彼らのすべてについて、どのような名前であったか、どのような顔をしていたのか、どのような人で、どんなことに興味があったのか、短く説明されているわけです。でも、ちょっと立ち止まってみる必要があるでしょう。イラクの爆撃で不幸にも2000～3000の子どもたちが亡くなったとしても、その全員の名前を知ることはいし、全員の顔写真を見る機会などないわけです。それぞれがどんな趣味を持っていたのか、どのような希望をもち、どのような家族がいて、どこに住んでいて、どんな遊びが好きだったか……などということが知られることはな

いわけです。これは、イスラエルとパレスチナの関係にも言えることで、アメリカの人々にはイスラエルの人々のほうがパレスチナの人々より、人間的に見えています。彼らの顔、家族、記憶、希望、愛、欲していることなどが伝えられるからです。しかし、一方で戦渦の犠牲者たちの死亡記事を目にすることはない。つまり、アメリカにおいては、メディア・イメージは、ある種の人々を人間化し、他の人々を非人間化する機能を果たしていて、人間的であると考えられているものの構造、つまり、人々の間の常識的なリアリティを創りあげているわけです。

——— 時として人々は、常識とユニバーサルなものとを混同してしまうことがあるように思いますが、その点については、どうお考えでしょうか？

バトラー： いわゆるグローバル・メディアは、ある種のリアリティを呈示していて、他のリアリティを排除しています。つまり、よくカバーされているものが世界を構成しているリアリティとされるわけです。つまりグローバルであるということは、ヘゲモニー構造に属しているということに他ならないのです。それは、いわゆるグローバル・メディアと呼ばれるものが、国際的な配信のできる資本力などをもった会社に属しているということです。こうしたグローバル性をユニバーサルなものとはき違えることは間違いです。

ユニバーサルなものというのは、ラディカルな総括性の原理のことであり、私の知る限り、いわゆるグローバル・メディアネットワークと呼ばれるものが、未だかつて持ち得たことのないものです。そのようなネットワーク、例えばCNNなどは国際的なイメージというものを売り物にしているわけですが、そのようなイメージは、決してユニバーサルなものの代用品にはなり得ないのです。例えばエイズについての報道を考えてみても、アフリカの深刻な飢餓の状況が、フランスの政争と同じだけの熱心さで報道されることはないでしょう？ 安っぽい国際的なイメージをユニバーサルであるかのように受けとるのは間違いです。

——— 現在のいわゆる戦争状態では、メディア・イメージの力、あるいは、それが呈示する常識は非常に強力だと感じますが、そのような状況をどのように考えていますか？ また、このような状況下の理論に関する言論活動について、どのように考えているのでしょうか？

バトラー： 私たちは、長きにわたって、ワールドトレードセンターが崩れ去る映像を毎日のように目にしました。そして、そこで奪われた命について、たいへん鮮烈なレポートを見てきましたし、危篤状態にある人々の様子なども知らされてきました。そのようなイメージや語りを通じて、私たちはたいへんはつきりとした犠牲者の像を得ました。そのために、この国で広範に愛国的、あるいは軍事的感情が引き起こされたのです。いま私が心を痛めているのは、私たちが経験した、攻撃に対する無防備さというものを、世界の他の地域で攻撃にさらされる人々が経験した無防備さにも当てはめて考えることができなかったということです。

今回のことは、自分たちの経験したものを他の地域の人たちを思いやることにも適用できる絶好の機会でもあったはずなのに、それができませんでした。アメリカで起こったことを、他の地域で起こっている悲劇と同一視することができなかったのです。アフガニスタンやイラクで一般市民が爆撃されたということについて、自分たちに起こったことと同じだと考えることができなかったし、パレスチナで起こっている戦渦についても、攻撃を支持してしまうことになる



許せないからといって、どうしてそれが起こったのか、あのような暴力行為が行われる素地はどのようにつくられたのかを考えないというのは馬鹿げています。つまり、私は、この結果についてすべてアメリカが悪かったんだといった論を張る立場でもなく、その原因について考えもしないという立場でもないありかたの必要性を訴えました。理由を知ることと無罪放免にすることは同じものではないと考えているからです。

それから私は「バイオレンス、哀悼、政治学」という文章を書きました。これは、アメリカが、9月の哀悼の時期からすばやく軍事行動を解決策にする時期へと移行したことを受けて書いたものです。この文章のなかで私は哀悼の時期がもしもう少し長ければ別の政治的状況が生まれ得たのではなかったか、またそういう状況では、アメリカ中心主義、あるいはアメリカ第一主義を推し進め、軍事的行動にでるという解決法を取るのではなく、むしろ国際的な紐帯を強めることができたのではないかと訴えました。哀しみと、物理的な弱さをさらけ出したことによって、むしろ軍事的解決ではなく「協同的なグローバルなアプローチ」とでもいうような方法がとれたのではなかったのかと論じ

— You sometimes use the term, “media image.” Could you please explain it?

J.B. We often think about the images illustrating a text. So, in newspapers you have a photo on the front page that illustrates the story next to it. Or on television someone is reading a text to you and there is a picture in the background or a picture in the foreground. And the picture is supposed to be illustrating the text, but in fact, I think, very often a picture is establishing a reality that cannot be established by words. And that happens in part, I think, by representing reality in the way that is very hard to give through a narrative or construction.

Especially during a time of war, I think the image can do many things that a narrative, an explanation or a report or a description cannot do. One thing the media image can do, especially if it is a part of global media or wide-spread international media some kind, is produce a common understanding of reality and a visual point of reference for the constitution of the public sphere. Everybody sees the same reality, everybody has the same angle and the same reality. Everyone feels that they are bound together in that they see the same image. So you can produce a sense of the public sphere and you can do it precisely by establishing a certain visual angle of reality, or also a certain visual interpretation of reality. And very often this is not actually translatable to linguistic terms, strictly speaking. I would say the visual image is a sign, you know, in some broad sense. It represents reality, but it is not identical with reality. So it is a motive of representation that can be understood as a sign, or even as language in a broad sense. But it is not same as narrative or explanation, or report or description.

So, you know, the other thing that, I think, happens in a time of war is that the given image cultivates certain kinds of public sentiments. So people not only see things in a certain way, but interpret it so that they feel it together. They introduce commonsense sentiments that

through the mass media image. And this can be a problem because the media image is always framed and it is also always edited, and it includes certain material and excludes other material. And it doesn't say what it is excluding. It simply presents what it includes as reality itself.

So, for instance, the obituaries function in the New York Times. Take that as an example: all these extraordinary obituaries for every last person who was killed in the World Trade Center by bombings. In a way it is a wonderful thing to have a public reading and to take all those lives and give them names and faces, and at least a small description of who they were and what they cared about. But there are no obituaries in the United States for two to three thousands of unlucky children whose deaths were hastened in the bombing of Iraq. They will never have any names; they will never have any faces. And we won't hear about their hobbies or their desires or their relatives or where they lived or what they loved to play. And again, in the U.S., at least in the Israeli-Palestinian conflict, it seems that Israeli lives are more human to the American public than Palestinian lives. They are given names and faces, given relatives and they have hopes and memories and loves and attachments of various kinds. And it is very hard to get a public obituary for those who were casualties of the war that the U.S. has produced. So at least in the U.S. I would say the media image works in a way to humanize certain populations and dehumanize others. And it constitutes a common sense of reality on the basis of dehumanization.

— People sometimes confuse common feeling or common sense with universality. What do you think about it?

左イスラエル軍の空爆により噴煙をあげる
パレスチナ人居住地区。
1982年6月、イスラエルはレバノン南部に侵攻し
首都ベイルートを占領した。
レバノン南部のパレスチナ・キャンプは瓦礫と化し、
71年よりベイルートに本部をおいていた
PLO (パレスチナ解放機構) は
レバノンから撤退した。1991年、サン
右19年の時を隔てて同じような形の噴煙を上げ、
放映される世界貿易センタービル。
パレスチナ人居住地区に見えるモスクのミナレットと
酷似するエンパイア・ステート・ビルの影が
記憶の再来を知らせる。



J. B. Well, I think that the global media includes certain realities and does not include others. I mean there are whole parts of the world that are not regularly reported on or reported on well. So, in effect, the media is global in the sense that it belongs to the hegemonic structure, but that means it belongs to the corporations that have power or that have international links by virtue of having power or having capital investments of various kinds. But it would be a mistake to identify the global with the universal.

And I think the universal is the principle of radical inclusivity that has never yet been achieved by any global media networks that I know. Even though sometimes there is an image of internationalism that is promoted by such networks like CNN. The promotion of an image of internationalism is not a substitute for universality. Even if you look at the AIDS reports, for instance, I think that the situation in Africa is really incredibly tragic. And I am not sure that the representation of famine, for instance, has never been extensively covered with the same interest with certain kinds of political battles within the French parliament. So I think one has to be very cautious about what seems like an easy internationalism or an easy international image that masquerades as the notion of universality.

During this war period, so-called, I think that kind of media image or common sense became more powerful in this country. What do you think about it? What do you think about the theoretical work in this time period?

J. B. We saw images of the World Trade Center collapsing every day for many many days, and we got very vivid reporting on what the loss of life was and how people almost died. And those images and those narratives gave us a very strong sense of identification with the victims, which in turn produced the widespread patriotic and militaristic sentiment in this country. But what worries me is that we didn't use our experience of vulnerability to understand the kind of vulnerability other people in the world experience.

It could have been an opportunity for us in the United States to expand our identification with people everywhere, and to understand the tragedy we ourselves have caused in bombing the civilian targets in Afghanistan and in Iraq or supporting the war against Palestinians. And I think that we failed to learn something of human vulnerability, of what it means to share the global human vulnerability that would produce the politics of peace. We identified exclusively as Americans who were victimized. And that gave us a sense of license to reach for war, and to become excessively patriotic and self-serving. I think, engaging an America-first mentality. My sense is that there was no strong media image or vivid image of the bombing in Afghanistan. We never saw the human losses we caused at all. We sometimes got written reports on how many people died or certain debates on whether they were civilians. But we never have the vivid imagery of those casualties including older women or young children. We have never got those.

In the war in Vietnam, it was the images of victimization of especially innocent children and villagers that really moved the anti-war sentiment in this country. But we had no such photography in any U.S. press. It was effectively forbidden.

It was as if our common sense of who we are or of what our national identity requires the exclusion of certain kinds of images. It was only by, in some sense, the censor of those images that we could continue to constitute ourselves as victims, and as a unified, patriotic country. But if those images have made the way into the U.S. press or into the U.S. media, I think it would have caused more dissent in this country. And I think photographic journals have enormous power in this regard, if they can get photos into the media itself. But there is a censorship process in the media. Certain kinds of violence can be graphically depicted, and other kinds are absolutely censored depending on whether it serves as a national interest.

It seems to me that theoretical work is very important during this time, insofar as theoretical work is critical. And when I think about critical theory in the most general sense, I think it is a perspective that asks how reality is being constructed. What are the mechanisms of power are through which reality is being constructed? How it might be constructed otherwise? I mean theory is everything to do with trying to think what is possible. Some people say "Oh, theory is not practical." If what they mean by that is that theory doesn't accept reality as it's currently constituted, then they are right. But to refuse to accept the reality that is currently constituted means that you want a different reality, or a better reality, or that you are trying to imagine another world. And I think theory is a place for intellectual imagining.

When you sense, or you decide that theory is

impractical, that usually means that you want to stay within the terms of reality as it currently exists. So, I think there is a kind of utopian dimension to theory, insofar as it allows us, in the face of overwhelming pressure, to sometimes refuse to accept the reality that has been constituted, through familiar meanings or through the media, either the text media or the visual media. It allows us to ask how it has been constructed, who is doing it, and what has been left out. What might another construction look like that would give us a broader conception of reality? What would it have been to produce a media image that actually allowed for several points of identification at once? One that did not just produce a single identification with a victim position that gives itself license to reach for military force or enormous destructiveness. So, yes, I think theory, especially when it is critical theory, is crucial during this time.

What kind of things have you said after 9/11 in this country?

J. B. In this country? Well, I wrote one piece called "Explanation and Exoneration," asking why there would be an enormous anti-Americanism among Islamic extremists; how the U.S. has intervened in western Asia and in the Middle East; and how this intervention has caused an enormous anger against the American people and American government. It is one thing to try to give an explanation for that. And it is another thing to say that the terrorist bombings are right or justified.



And I want to say that the terrorist bombings are not right or justified, but it would be foolish if we became afraid of thinking about what the reasons for this were.

Some people were saying, "I do not want to know the reasons. It is just evil." Or they would say, "Oh, if someone tries to give the reasons for this, they are making their excuses for this terrorist action. And I do not want to hear any excuses." But some people on the left were also saying, "Oh, this is what the U.S. deserves. They brought it on themselves. This is their own violence coming back to haunt them." And I think, in fact, I would refuse both positions. I think, yes, the U.S. has produced the conditions that would breed an

enormous anti-Americanism. It has exploited people; it has helped to produce the differential wealth across the globe; it has supported corrupt regimes. It has been responsible for the violence against Middle East populations, especially Iraq population. That is significant. But in fact those people who decided to oppose the U.S. through violent means are responsible for their violence. Yes, they are. And I think that their violence was wrong. On the other hand, I think we would be foolish if we thought just because we object morally to what they did, we do not have to think about the reasons or the conditions under which this kind of violence was bred. So, I was calling for a position that does not only blame the U.S. for

the violence, but also that does not refuse to think about what the reasons are for this. I am in opposition to a conviction that any explanation would be an exoneration. I do not think they are the same.

I also wrote a piece, "Violence, Mourning, Politics," noting how quickly the U.S. went from a period of collective mourning in September to a military solution to the problem. I am wondering whether if we had stayed the period of mourning longer, whether we could not have developed a different kind of politics that would have actually strengthened the international ties rather than producing American unilateralism, a presumption of American primacy and the extended military response. So, I wrote some about how the experience of grief and the experience of physical vulnerability could actually be a basis for a cooperative global approach to the conflict rather than a military solution. I also signed various petitions with various intellectuals both in Europe and here opposing the war. More recently I have signed a position as an American Jew who is opposed to Israeli policy.

And I have written a couple of pieces on the detention of the prisoners in Guantanamo; one of them in the *Nation* and another has come out in a volume on the suspension of civil liberties post 9/11. I am very concerned with the way in which both the international law and the Constitution of the U.S. have been ignored in the imprisonment of suspected al-Qaeda members. They are treated very often as animals or as sub-human, and universal rights are suspended. I think it is only through a certain kind of racism that we can understand international law and constitutional law as laws that can be suspended. Those are the things I have been doing. Here was also see who is left out of the conception of universality underwriting international law.

— When you presented your ideas at Princeton University, you said you felt that not so many people agreed with you at that time.

J.B. I think most of the people in the audience, or many of them at Princeton were very pro-war. And they are in favor of the war against Afghanistan and they also think, oddly, that it was a feminist cause—that the Afghan women will be liberated by the U.S.. They also seemed not to mind that the enemy shifted mid-stream, so that we were fighting not al-Qaeda but the Taliban. Belatedly, we were told that the Taliban were important to fight so that we could bring Western values to Afghan women. And the vocal opposition of Afghan women to the Northern Alliance was also fully ignored. Nobody bothered to ask Afghan women if that is what they wanted. And many of those people who understood this to be a feminist war, which I found to be an appalling idea, never had any contact with Afghan women's groups.

If they did, they would know that Afghan women as an organized group had a great fear about returning to a situation in which the warlords would be running Afghanistan and they would not be protected from rape or from sexual violence. Also, even if many of them had their own choice to remove the burka, the veil they wear, they did not want to. They did not understand the burka as a sign of repression. For many of them, it is a sign of honor, or a sign of modesty, or sign of belonging to the community. But in the U.S. many of the people who understood this war to have a feminist dimension did not bother to find out what the meaning of the burka is for the women who actually wear it, and just assume that everybody would want to be like Americans. I think it is a terrible mistake.

— I remember that in China people have not allowed wives to use their husband's family name. They exclude wives even though they work for their families. Chinese couples have used different names after marriage for a long period of time. So, the most advanced couples try to use the same family name, for example. It is a different attitude from that of American feminists who want to keep their names after marriage. It might be said, I guess, in your terms, that a cultural translation is needed in this case. But I think that if we find common meaning in different situations, it is still different from universality. What do you think about this?

J.B. OK. I think it is important to say, probably, there are different kinds of American feminists, but some of them certainly believe that they know what the universal values are. And that they believe that they are in a position to legislate to other cultures and other societies how women should be treated. I think there are other feminists who would say we have to learn what the meaning of quality is, or what the meaning of justice is, and that we cannot theorize what quality is or what justice is from a single cultural location. That the only way we would come to know what those terms mean or can mean is by engaging in coalitional conversations or in a coalitional work with women from wide variety of locations around the globe to find out what the meaning of quality is in southern Italy, or what the meaning of quality might be in Guatemala. And what the terms are in which those problems are thought, and they are different depending on whether you are in a heavily Catholic culture or in a social democratic culture, or a capitalist one, or a totalitarian one. The issues are very different.

But I am not exactly a relativist in the sense that I do

たのです。私はヨーロッパやアメリカで戦争に反対するいろいろな知識人と共にさまざまな請願書に署名しましたし、最近では、私はアメリカのユダヤ人としてイスラエル政府に反対する立場に与しています。

他には、グアンタナモの囚人留置についてふたつの文章を書きました。ひとつは、『ネイション』に書いたもので、もうひとつは、9.11以降の市民的自由の制限についての論考を集めた本の中の文章です。私は、アルカイダ兵士と疑われる人々の抑留に関して国際法と憲法が無視されているということに非常に関心をもっています。なぜなら、彼らは時に動物のように、人間以下のものとして扱われているからです。もちろん、それはある種の人種差別の文脈から起こっていることだとは思いますが、そこでは国際法や憲法が適用除外にできるといふ考え方が横行していることが問題だと考えています。このようなことを発言してきました。国際法の裏打ちとなっているユニバーサリティの概念から誰が抜け落ちてしまっているのかを考えようとしているのです。

——— ブリンストン大学で行われた戦争に関する討論会で、あなたの考え方に賛成する人が少なかったと聞いていますが、実際のところはどうかだったのでしょうか？

バトラー： ブリンストンの集会では、ほとんどの参加者が戦争支持でした。多くの聴衆はアフガニスタンの戦争をよしとしていて、なかには、奇妙なことにフェミニストの立場からそれを支持するという意見もありました。つまり、アフガニスタンの女性は、アメリカによって解放されるはずだという論理です。その人たちはタリバンが戦術を変えつつあることにも注意を払わずに、アメリカがアフガニスタン政府と戦っている意義は、単にアルカイダを殲滅することなのではなくタリバンをたたくことにあととを考えていて、そうすれば西欧流の人権をアフガニスタンの女性たちにも与えることができると主張していたわけです。しかし、その人々は、アフガニスタンの女性たちが北部同盟に対してもっている拒否感について全く無視していました。誰も実際にアフガニスタンの女性たちにそれが彼女たちの望んでいることなのか確かめてもいないのです。この戦争をフェミニスト的な解放戦争であると考えている人たちの考え方には、まったくぞっとしました。彼女たちは、アフガニスタンの女性グループとつながりをもっていないんです。

もし会いに行けば、組織化されたグループとしての彼女らが、レイプや性的な暴力行為の横行していた群雄割拠の時代にはもう決して戻りたくないと考えていること、また選択の権利があったとしても多くの人がブルカと呼ばれる顔を隠すヴェールを外したいとは思っていないことなどを知るはずなのですが、アフガニスタンの女性にとって、ブルカは抑圧の象徴だというわけでもないのです。むしろブルカは、多くの人にとって、誇り高いこと、控えめであること、あるいはコミュニティに属していることの象徴であるわけです。ところが、アメリカでアフガニスタンでの戦争がフェミニスト的な解放戦争だと考えている人たちは、実際にブルカを着用している人にとってのブルカの意味なんか知らずともせず、誰もがアメリカ人女性のようにになりたいはずだと思いこんでいるのです。私はそんな考え方はひどい間違いだと考えています。

——— あなたの話から、中国の戸籍名のことを思い出しました。中国では普通、女性は嫁ぎ先の姓を名乗りませんが、それは、嫁いだ先でその家のために働いていても、嫁は他の家の人間だという考え方があるわけです。だから、



★2002年1月11日。

キューバのグアンタナモにあるアメリカ海軍基地にアメリカ軍に捕らえられたアルカイダ兵士が到着した。その様子がペンタゴンによって発表され、各メディアがそれを報じた。写真には、捕らえられた兵士に手錠がはめられマスクが付けられているところが写し出されていた。これをきっかけに、アメリカが行っているアルカイダ兵士に対する非人道的行為に対して、諸外国から非難の声が上がった。



進歩的な中国人カップルは結婚した場合に姓を一緒にしたいと考える。そんな文化的違いから、進歩的な女性の結婚後の姓についての態度が、むしろ西欧とは逆になる。これは、あなたの言う文化翻訳と関係があるのでしょうか？
しかし、翻訳した結果、それぞれの文化においては等価であると考えられるもののそのものも、まだユニバーサルなものであるとは言えないように思いますが、その辺りについて少し聞かせていただけますか？

バトラー： まず、はっきりさせておく必要があるのは、アメリカのフェミニズムにもいくつかの潮流があるということです。確かに間違いなく、フェミニストの一部は、ユニバーサルな価値というものがあると信じて、他の文化においても、女性がどのように扱われるべきかについて決めつけてかかっています。しかし、一方で、フェミニストのなかには、良質なものととはなにか、公正さとはなにか、ということを学ばなければならないし、それらの作業は単一の文化的状況だけからは学び得ないと考えている人々もあるのです。そのためには、地球上の別の地域に生きる人々とのお話や共同研究によって、例えば南イタリアやグアテマラにおいて良質なものととはなにかといったことを対照することが大切なわけです。つまり、問題や考え方そのものが、例えば、カトリックが支配的な国なのかとか、政治的な状況がどうなのか、例えば、社会民主主義の国なのか、資本主義の国なのか、また、独裁制の国なのか、そういう状況によって問題になることそのものも大いに違うわけです。

だからといって私が相対主義者だというわけでもありません。なぜなら私は、人はだれでも、なにが公正なのか、なにが良質なもののなのか、あるいは、なにが



2001年9月11日、
「ニューヨーク世界貿易センターへの
旅客機突入のニュースに喜ぶバレスチナ人」
として当日の各局ニュースで放映された
CNN映像。

(U.S. NAVY)

think one can ask what justice is, what quality is, or what universality is, and hold on to those as principles and as aspirations, as hopes, and as ideals. But simply realize that those ideals would never be accomplished except through the very process of cultural translation whereby we learn more about what women's aspirations are within the cultures that they live, or in various cultural connections. For example, a woman who is Islamic and British, and working class, is going to have a set of aspirations that are complex. And she should not become uniformly European in some way that excludes Islam for instance. This is a big question in Europe right now; whether European identity can accept its Islamic population as part of its identity, or whether it will defend its identity against the Islamic community.

That is one of the things that happened in Holland recently. I think we have to rethink in the same way that Europe has to rethink what it is to be European, as there are many north Africans and Islamic people living there who become a part of their community. We have to rethink very basic categories, such as justice, and quality. I am not sure any of those categories have been arrived at. But those members of the Bush administration who thought that this war against Afghanistan was a feminist war have never bothered to consult with those women nor do they really question the notion of feminism as a Western project of imposing its own ideas of universal value. I think the more the west imposes its conceptions of universality on the rest of the world, the more violent responses against it will be.

— You wrote in the *Nation* that the international law should be obeyed, but at the same time international conventions exclude some people, and this is questionable. How we can deal with this complicated situation?

J.B. I think this has to do with two different things, if the U.S. says it is not going to obey the Geneva Convention and treat the Guantanamo Bay prisoners humanely. It would do that, because it believes that these individuals do not belong to a nation state that is a party to the Geneva Convention. It is true that the Geneva Convention was constructed to protect the populations of existing recognizable nation states. It is also true though that there is a body of international law that tries to correct that, so that the international court has developed protocols—human rights watchers developed protocols that would extend the Geneva Convention protections to individuals who do not belong to recognizable nation states. The U.S. has the choice to follow that extended reading and newer precedents that have been established, or to ignore them and stay with the strict narrow reading of the Geneva Convention

which is itself questionable. My point would be that the U.S. must submit to international conventions and understand itself as a nation among nations and be obligated to all peoples according to internationally arrived-at law. But we also have to understand that international law is not fixed in time. It is evolving. There are new precedents all the time. So, if the U.S. would work within the framework of international law, to figure out "OK, what are the new precedents under which we treat al-Qaeda members humanely?" that would be one thing. But they are exploiting the 1949 document as if no international law

has been written since then, or as if precedents established since then exclude the al-Qaeda members from coverage. As if it is exploiting technicality for the purpose of detaining these prisoners indefinitely and getting as much information from them as they can, without even giving them rights to counsel. So, yes, I think it is important to obey the international law, and also it is important to criticize international law and to be part of the project of refashioning it so that it will become more radically inclusive. I would say both are true. It only becomes a contradiction if we think of international law as fixed in time: "This is the law. We have to obey." No. It means you submit to the process, or enter into the process of trying to think out the solution within the framework of the international law. And it is this commitment that the U.S. has not made.

— I think your term, "cultural translation" and this kind of evolving process are similar. Because both of them are not in a stable state but they are movements toward something universal. And the universality has not yet been achieved.

J.B. No, it has not been achieved yet. And maybe it is unachievable. I mean it is an ideal after which we have to strive constantly.

— I think theoretical work should describe such movements.

J. B. Yes, I think so. That sounds right.

— One more thing that I would like to ask. These days the internet is creating a common sphere. But language on the internet is more colloquial than other media. I think the function of language is changing now. What do you think about it?

J.B. Well, it is interesting. You know, there are press sites on the internet that still use more formal language. But then, there are chat rooms or there are email lists, or web sites of various kinds that are constructed by particular groups. Those can have a variety of voices. Some of them are very intermediate, and some of them are very casual, or colloquial as you say, but it does permit breaking up the discourse in a public sphere. When you have different modes of expression that populate the public sphere, that situation can allow us a fragmented and diverse sense of what language is or who can participate. I think it would be interesting to know whether the internet makes participation more democratic, which is the question you are interested in. I do not have an answer to it, but it certainly seems to me that I have been very dependent on various email lists.

Two things I was dependent on: email lists that came out of the West Bank, or Jenin; I was getting reports from *al-Ahram*, the Arab weekly and editorials from them which I have never seen in the mainstream media. Some of those reports were very heartfelt. They were not always in perfect English, they were reports from scenes of the war in Israel and Palestine. These reports have the power to sometimes break up, for their readers, the official public discourse. They have been very important to me. But other sites that I have been dependent on are human right sites. If you look at Amnesty International or Human Rights Watch, both of them had elaborate statements on the suspension of civil liberties. They

当該箇所は他者の記事部分のため、
著作権により削除しています。

ユニバーサルなものなのかということを知ることができるし、原理や大きな希望や願い、あるいは理想として、それにこだわるできると考えているからです。ただ、そういった理想は、自分の文化的背景や住んでいる環境に応じてなにがそういった女性にとっての理想なのか、また他の文化との関連ではそれがどうなるのかということを知り文化翻訳の過程を通じてしか実現し得ないことははっきりしていると思っています。例えば、労働者階級のイスラム系イギリス女性という人にとっての理想は、イスラム的なものを排除しようとする傾向にあるヨーロッパにおいては相当複雑なものにならざるを得ません。現在、ヨーロッパではヨーロッパの人口の一部をなしているイスラム系住民のもつ文化をヨーロッパ的なものの一部として受け入れられるのか否かということが大問題になっています。

実際、最近招聘されて行ってきたオランダではそのことが問題になっていました。つまり、現在、北アフリカ系、あるいはイスラム系住民がある程度の割合を占めているヨーロッパで、ヨーロッパ的なものとはなにかということを考え直さなければならなくなっているのです。公正さとは、あるいは良質なものはなにかという基本的な範疇そのものを考え直さなければならなくなっているわけです。それなのに、ブッシュ政権下で今回のアフガニスタンに対する戦争がフェミニスト的戦争であると考えている人たちは、そういう考え方が西欧流の価値観をユニバーサルな価値だとして押しつけていることになるということに気付いていない。そのように西欧が自らの価値を他の地域に押しつけるようなことをすればするほど、そのために暴力的なことが引き起こされると思います。

—— あなたは、最近の『ネイション』紙に発表したグアンタナモ基地に収容されている捕虜の扱いについて書いた文章のなかで、国際法にはこの場合従わなければならない、しかし、一方で、国際法自体、もともと何が正当なことなのかについて偏っているということを主張しています。これは、ある意味で複雑な議論ですが、どのようにこの問題を考えたらよいでしょうか。

バトラー： そのとおりです。私は、これに関して、ふたつの異なった視点を持たなければならないと考えているのです。アメリカが、ジュネーブ条約に則ってグアンタナモの捕虜を人間的に扱う必要がないと考える理由は、捕まっている人たちがジュネーブ条約上で規定する国家に属していると認められないからというわけです。確かにジュネーブ条約はもともと確立した国家に属する人々を守るためのものだったわけですが、しかし、同時に、国際法廷や人権団体がこれまでもプロトコルをつくってジュネーブ条約を拡大解釈して、国家に属さない人々にもそれを適応し保護しようとしてきたのも国際法全体の大きな動きであるのも事実です。アメリカには、そうした徐々に確立してきた拡大的な読み方に与することもできるし、また、そういう動きを無視して元来疑問の余地があるジュネーブ条約の狭義の読み方にこだわることもできる。私としては、もちろんアメリカが多くの国家のうちのひとつの国家として国際法に従う必要があるということだけではなく、国際法自体が固定化したものではなく変化するものだということ、次々にあたらしい判例が出てくるものだということを理解しなければならないと思います。アメリカが今回のアルカイダ兵士を扱う上で、どのような前例があるのかを検討しようともせず、1949年の条約以来成文化されたものはなく、また確立した拡大解釈もいまだ存在しないのだという主張をし、アルカイダ兵士をジュネーブ条約の枠外に置いていることは問題です。彼



らに人道的な処置を与えず無制限に拘束してより多くの情報を引き出そうとしているのです。つまり、私は国際法に殉じなければならないと同時に、国際法がより包括的なものになるように時代に合わせて批判的に検討することも大切だと考えているわけです。その両方ともが正しいと考えているのです。国際法というのは従わなければならないものではあるわけですが、もし、国際法がある時代に固定化したものだと考えるなら矛盾が生じます。つまりこれが法なんだからそれに殉じなければならないというやり方ではだめなのです。国際法という枠組みで解決法を考えるという過程に参画することが大切なのですが、アメリカはそういう関わり方をしていないわけです。

—— あなたのいう文化翻訳と、そういう過程に参画するということには共通性がありますね。両方とも、ある静的な状態ではなく、ユニバーサルなものに向かつての運動の過程と考えるという点が似ているということです。しかし、そのユニバーサルなものは実現はされていない。

バトラー： そうです。そして、おそらく実現しえないものなのかもしれませんが、常にそれを目指し続けなければならないもののなのです。



□アメリカ軍の空爆後のカブールの兵舎。
米同時多発テロ事件の報復として、
米英両軍は2001年10月7日夜(日本時間8日未明)、
アフガニスタン攻撃を開始した。
首都カブールのほか同時テロの首謀者とされるウサマ・ビンラディン氏を
かくまうタリバン政権の本拠地カンダハールなど6都市を空爆、
ブッシュ米大統領は「テロとの戦争」を宣言した。
写真(下/UPi・サン)も映像による報道も、
米国の視線によって事態を目撃する。



were really terrific. But you never ever find these statements in the mainstream press. I have never seen them in the New York Times, and I did not hear about them on radio or television, or even in some of the more progressive journals. But I was able to get large documents: an extraordinary one by Amnesty that came out, I think, in May, and another one from Human Rights Watch by Kenneth Roth who had all kinds of extremely important things to say about the new war tribunal and the detainees in Guantanamo. They did not get mainstream reporting but were accessible to me and allowed me to develop a perspective that I would have had a very hard time in developing my own if I had only been dependent on the mainstream media. And even Afghani women's organizations: there was a large feminist network that was contesting the so-called feminism of the Bush war against Afghanistan. And I learned about what the Afghani women's organizations were saying at their meetings and what their critique of the war is, or the critique of the Taliban and the critique of the Northern Alliance too. And many of them did not want to participate in the government of either one. We never saw that in the New York Times, but I certainly learned it from the web through some kind of casual reporting process that some feminists put up on the web site. It was useful to me.

—— The internet is useful to retrieve information. That is true.

J.B. You asked me about colloquial language. Yes, I think there is a possibility of having a huge range of such discourse. There is a group called Professors for Peace, which lists six or seven items every day, and every one is written in a different style. There is a certain chaos or non-conformity to this discursive realm that makes you realize it is not fully regulated and it is not producing the same concept of reality.

—— As you said, the media image cannot be interpreted into language sometimes. Some colloquial languages diffused on

the internet also sometimes cannot be interpreted into written language in an orthodox sense. Is there some sense in which those colloquial languages on web sites are similar to the media image?

J.B. It depends. If the media is controlling the image, then very often the image is meant to establish a very powerful sense of reality, even more powerful than anything that can be realized through language. But if you are talking about colloquial languages that are emerging from various sites, they are not yet under media control, or not yet in the relationship of government censorship. They can say things that have not yet been edited or judged, or censored, or prepared for public consumption by an editorial group or public relations group.

Then, it seems to me that there is more of a possibility of breaking up an official discourse or reality. But sometimes the media image backfires. It is very hard to control an image. When the U.S. published the photo of Guantanamo prisoners shackled with their masks, they meant for this to be triumphant: "Look. The U.S. has found those who were responsible for the violence against it. And they have forced them to their knees." It was supposed to be a sign of U.S. triumphalism. But instead, there was an outbreak of outrage from various countries saying this is inhumane treatment, that the U.S. has gone too far. And the photo itself actually imperiled the British-U.S. alliance. So, it was very powerful moment where the U.S. Defense Department published the photo, thinking it would just be boasting the era of military triumphalism, and it undermined its own capacity to sustain its coalition. Thus, sometimes an image can backfire. Those who make it do not know how it will be received. There is a kind of instability in an image, which is sometimes greater than the instability of language because of its emotional impact. Sometimes not.

当該箇所は他者の記事部分のため、
著作権により削除しています。

つまり、理論とはそのような運動の過程を表現するものだいこうことでしょうか。

バトラー: そう考えています。

それでは、最後に、テレビや新聞と比べて、同じように人々が共有する場を作り出しているインターネットでは、言語がより口語的であると考えられますが、それについて少し意見を聞かせて欲しいのですが。インターネットは、言語のもつ活動の幅を拡げていると考えられるでしょうか。パロール的なものの役割が増しているというか、言語の役割が常識を形作る上で変化しているという風には考えられないでしょうか。

バトラー: そうですね。そういう観点からあまり考えたことはありませんでしたが、面白い観点だと思います。新聞社のインターネットサイトではフォーマルな言語が使われていますが、確かに、チャットルームやメーリングリスト、あるいは、ある種のグループがつくるホームページでは、なかには、ご指摘のように口語的な表現も多く、公共の場での対話をつくりあげていますね。その意味では、公共の場をより大衆的にするいろいろな表現のモードがあるので、言語とはなにか、あるいは参加できる場ということについてより断片的で多様な見方を許すことになっています。インターネットが民主的な場になるかどうか、ということも興味深いかもかもしれませんが、まだ私には答えはありません。

ただ、私はいろいろな情報をインターネットによって得ています。例えば、パレスチナ西岸地区やジェニン地区などからのメーリングリストに入っていますし、またアル・アラブという週に一度送られてくるレポートにのる論説などは、西側の主要メディアでは決してお目に掛からないようなものです。もちろん、英語表現自体は不完全なものが見受けられますが、イスラエルとパレスチナの間の戦争状態にあって非常に真摯な主張を読むことができます。そういうものはまったくアメリカの主要なメディアには載ることがありませんよね。でも、私にとっては公式的言説を突き崩すものとして大切なものです。また、人権団体のホームページ、例えばアムネスティやヒューマン・ライツ・ウォッチといったサイトには私もだいぶお世話になっていますが、そういうサイトには、人権に関して素晴らしい意見が載せられています。本当に目を見張るものがあるのですが、これらも主要なメディア、例えばニューヨーク・タイムズやテレビ、あるいは、もっと進歩的な雑誌のなかでさえも見たことがありませんでした。例えば、2002年5月にアムネスティのページに載せられたグアンタナモの捕虜に関する情報や、ヒューマン・ライツ・ウォッチのケネス・ロスによる報告は、この問題について考えるのに主要メディアだけに頼っていたのでは決して得られなかったであろう視点を私に与えてくれました。それに、アフガニスタンのフェミニストネットワークの情報もインターネットから手に入れていましたが、そこで展開されていたのは、ブッシュ政権下のフェミニスト戦争という見方とは対照的な意見でした。そこではタリバンに対する批判だけでなく北部同盟に対する批判も繰り広げられていて、そのどちらにも与したくないという意見が交換されていました。そんな内容がニューヨーク・タイムズなどに載ったことはなかったのですが、私は、ウェブのカジュアルなやり方で、そんな情報を手に入れることができたというわけです。

そうですね、情報検索という点では、確かにインターネットは便利で

すね。

バトラ: そして、確かにあなたの言うように、口語表現あるいはインフォーマルな言語表現と、いわゆる公式的な言語表現というものの対比という点では、言語表現の幅は相当広いと言えるでしょう。例えば、プロフェッサーズ・フォー・ピースという紛争を平和解決することを目指す大学人のネットワークのサイトがありますが、これには、毎日6〜7のアイテムが載るのですが、どれも違うスタイルで書かれています。そこには、画一化していない散漫な混沌とした世界があります。つまり、それは、統制されていないということ、あるいは同じリアリティを共有していないことを示していますね。

——— そうですね。メディア・イメージは書き言葉としては表し得ないことがあるということでしたが、例えば、インターネットで流通している口語的な言語表現というものが、同じようにフォーマルな書き言葉にはならない場合があると思いますが、それとメディア・イメージの役割とはどのような関係にあると考えられるでしょうか？ それらは、似たような機能があるのでしょうか？

バトラ: 場合によると思います。メディアがイメージをコントロールしている場合、イメージは時として強力なリアリティを創りあげるために利用されているわけです。しかも、そのリアリティは言語表現では創り得ないほどの強力なものであることすらあるわけです。しかし、インターネットに現れる口語表現は、メディアのコントロールや政府の検閲とは関係ないのです。その意味で、それらはまだ、編集されたり、判断されたり、検閲されたりしていない状態の表現なわけですし、公的な見解として、編集委員会やら広報担当者らによって整理されたものではないわけです。つまり、そういった口語表現は、いわゆる公式的言説やリアリティを崩す方向に動いていると考えられるわけです。

ただし、メディア・イメージがコントロールされた意図を裏切ることもありますね。イメージはコントロールがとて難しいのです。例えば、アメリカ政府はグアンタナモに収容された人々の写真を発表しました。マスクをされている囚人たちの写真です。あれは、もともとテロリズムに関係した人々を捕らえたことを誇らかに示す勝利宣言として発表されたはずですが、その意図に反して、世界各地からの多大な反感を招いてしまいました。アメリカはやりすぎだ、施すべき人道的な配慮をしていないじゃないか、というわけです。写真は英米共同戦線を突き刺してしまったわけです。まったく、国防総省が軍事的勝利を自慢するために、あの写真を公表したのは実に重要な瞬間だったわけです。結局、それは共同戦線を維持してゆくこと自体を蝕むものになったのですから。確かに、イメージは、そのイメージがどのように受け止められるかが予想しきれなかった人々を裏切ることもあるわけです。イメージは感情的なインパクトを持つが故に、その不安定性は言語のそれより大きいことがありますね。

——— 2002年6月 アメリカ・ニュージャージー州プリンストンにて

*1 "Explanation and Exoneration, or What We Can Hear," in *Theory and Event*, Johns Hopkins University Press, 5:4, Winter 2002, <http://muse.jhu.edu/journals/theory_and_event/>; in *Social Text* 72; in *Greek in Synchrona Themata*.

*2 "Violence, Mourning, Politics," in *Studies in Gender and Sexuality*, 4:1; in Italian, in *Nuovi Argomenti*; and in French, in *Nouvelles Questions*.

*3 "Guantanamo Limbo," in *The Nation*, April 1, 2002, pp.20-24.

*4 "Indefinite Detention," in Victor Goldberg, ed., *It's a Free Country: Personal Liberties after 9/11*, New York: RMD Press, 2002.